



## 現代世界で起こったこと

-ノーム・チョムスキーとの対話 1989-1999-  
ノーム・チョムスキー著 ピーター・R・ミッチェル、  
ジョン・ショフェル編 田中美佳子訳  
日経BP社 2008

法学部教授 長谷川 宏

現代の日本・世界で起きていること、特に3.11以降の日本で起きていることを見聞きしていて、「何でこんなことになってるんだろう」「何かおかしいな」と思うことはありませんか？そんな人は、騙されたと思って、この本を手にとってみてください。謎を解くカギがこの本のいたるところに隠されています。副題に「1989-1999」とありますが、「よく考えたら、これって実は今まさに日本でも起きていることと同じじゃないか?!」とか、「どうも話がおかしいと思ってたら、そうか、こういうことだったのか!」という話が満載です。

この本はノーム・チョムスキーという人の講演録です。この人は本職は言語学者ですが、タブーを恐れず鋭く本質を突く政治的著作・発言で世界に広く知られています。今世界中で生きているあらゆる人たちのうちで、その著作が引用される回数をもっとも多い人なのです。つまりそれだけ影響力が大きく、彼の発言・考え方に注目している人が多いということです。この本には、チョムスキーと聴衆との生々しい質疑応答が収録されていて、ものごとの本質に鋭く切り込む彼の鮮やかな受け答えぶりに驚くことでしょう。

「うーん、でもよく考えるとそうだよな… 鋭いこと言うな、この人…!」という「目からウロコ」体験を、どのページを開いてもできる本なんて、皆さん今までに何冊出会ったことがありますか？この本はそういう本です。



①



②



③

## ① 内部被曝の脅威 -原爆から劣化ウラン弾まで-

肥田舜太郎、鎌仲ひとみ著 筑摩書房 2005 (ちくま新書)

## ② Frankenstein: Mary Shelley

edited by Fred Botting

Basingstoke: Macmillan, c 1995 (New casebooks)

## ③ 困ります、ファインマンさん

R.P. ファインマン著 大貫昌子訳 岩波書店 2001 (岩波現代文庫)

法学部准教授 大井 万紀人

2011年3月、人類史上最悪の原発事故が日本で起きた。国土の半分近くが放射能物質で汚染され、農水産物はこれから100年以上に渡って、セシウム137などの半減期の長い放射性物質にまみれていくことになった。さらに、福島周辺では、原子爆弾の燃料と同じプルトニウムが環境中に放出されてしまった。放射能物質に大地を汚染された日本人が、これから100年間気をつけていかななくてはならないのは、外部被曝ではなく内部被曝だ。その恐ろしさは、広島と長崎の尊い犠牲を通して私たちは知ることができる。そんな貴重な経験を、広島で生き残った医師が伝えてくれるのが『内部被曝の脅威』だ。

現代社会は、科学の進歩と、その原理を利用した技術革新によって支えられ、繁栄している。しかし、それが諸刃の剣であることは、今回の原発事故のみならず、核兵器や地球温暖化、化学物質の乱用による環境汚染、遺伝子操作など、様々なところで明らかとなっている。この文明のスタイルは、18世紀に英国で始まった産業革命に端を発するが、19世紀頃には既にこのやり方への警戒は生まれていた。英国の女流作家 Mary Shelly の“Frankenstein”は、そんな問題を投げかけた最初の小説といえよう。生物学を応用し、人間の死体を繋ぎ合わせてつくった人造人間は、科学の光なのか闇なのか考えてみて欲しい。

20世紀に入り、「絶対安全な技術」を生み出したと奢り高ぶる人間に神の雷が落ちる。1986年の冬、爆発を起こして粉々に散ったスペースシャトル「チャレンジャー」の事故だ。スペースシャトルは、現代技術の全てが集められた、人類が作った史上最高の傑作であることは間違いない。それでも事故が起きるということを人間は思い知らされた。事故調査委員の一人だったノーベル物理学賞受賞者 R.P.Feynman の「困ります、ファインマンさん」を読めば、無理な運転が如何に悲劇を生むかわかる。日本の原発を作り、動かそうとするものは“Errare humanum est.”という古代ローマの格言を知っておくべきだろう。